

発行：熊谷市立江南文化財センター

TOPICS

国史跡指定記念「幡羅官衙遺跡群」特別展を2会場で開催中！

現在、平成30年12月28日（金）までの会期で、「幡羅官衙遺跡群」が国史跡に指定されたことを記念して、江南文化財センターと別府公民館において、特別展を開催しています。

このたび国史跡に指定されたのは、「幡羅官衙遺跡」及び「西別府祭祀遺跡」の2遺跡で、これらは郡家の全体像が把握できるとともに、付属する祭祀場も含め、その成立から廃絶に至るまでの過程が確認でき、また、地方役所の構造や立地を知る上で大変重要な遺跡です。幡羅官衙遺跡群は、熊谷市西別府と深谷市東方(ひがしかた)にまたがる地区にあり、「幡羅官衙遺跡」・「西別府遺跡」、「西別府祭祀遺跡」、「西別府廃寺」の4遺跡から構成され、古代武蔵国に当時あった20郡のうちの一つ、幡羅郡の郡役所及びその周辺の関連遺跡です。「幡羅官衙遺跡」・「西別府遺跡」は幡羅郡家（郡役所跡）、「西別府祭祀遺跡」は郡家に付属する湧泉祭祀場跡、「西別府廃寺」は郡役所に付属する寺院跡です。これら3つの要素が有機的に機能していた郡役所は、全国的にみても数例しかなく大変貴重です。

展示では、西別府祭祀遺跡の、湧泉祭祀に用いたとされる石製模造品や墨書土器、河川跡から出土した木簡など、幡羅官衙遺跡・西別府遺跡の、土器や正倉跡から出土した炭化米などのほか、隣接する下郷遺跡出土の、当時の役人が身に付けていた帯金具（ベルトのバックルや飾り金具）や幡羅郡名がわかる墨書土器などを展示しています。また、西別府廃寺は、土器や釘・刀子など鉄製品のほか、大量に出土した瓦を用いて、当時の寺院の屋根瓦を再現展示しています。今回の展示品のうち幡羅官衙遺跡出土品は、深谷市教育委員会から借用しており、幡羅官衙遺跡群の出土品を一堂に会しての展示は、見応えのあるものとなっております。ぜひ、この機会に足をお運びください。なお、特別展会場のうち、別府公民館は、幡羅官衙遺跡群に隣接していることから、展示の見学と併せて実際に遺跡を散策することで、当時の姿をイメージしてもらえることを期待しています。（腰塚）



江南文化財センター 西別府祭祀遺跡展示風景



幡羅官衙遺跡群全景（南東から）



江南文化財センター 西別府廃寺展示風景



幡羅官衙遺跡群全体復元イメージ

市内遺跡発掘情報

前中西遺跡発掘調査「古墳時代後期の水辺の祭祀」

6月に実施した上之地区の発掘調査では、衣川の旧流路と湧水箇所、溝跡などが確認されました。旧流路は弥生時代中期後半（約2100年前）ごろには存在していたと考えられます。溝跡は2条確認され、1つは弥生時代中期後半のもの、もう1つは古墳時代後期（約1600年前）のものです。湧水箇所は、弥生時代の溝跡が埋没した後に発生し、古墳時代の溝跡と同時期に存在したようです。湧水箇所と古墳時代の溝跡からは、土師器坏や高坏がまとまって出土し、桃の種が400粒以上確認されました。桃は邪気を払うものとして珍重された樹木です。また、滑石製の臼玉が1点出土しました。これらはこの時代の祭祀遺物として典型的なものです。水はいつの時代も生活に欠かせぬものであり、湧水箇所を神聖視した古代の人の祈りがうかがえます。（蔵持）

【写真：（上）土師器出土状況（下）桃の種出土状況】



瀬戸山古墳群発掘調査「古墳の周溝を確認」

平成30年8月、市内平塚新田における個人住宅建設に伴う記録保存のため、瀬戸山古墳群の発掘調査を実施し、古墳1基の周溝が確認されました。これは、全体の1/4ほどが確認されただけでしたが、古墳の規模は直径10m前後と考えられ、その位置から新しく発見された古墳ではないかと考えられます。ただ、墳丘の大部分は削平され、石室も確認できませんでした。周溝の一部からは円筒埴輪の破片が多数発見されています。築造年代については、今後の検討が必要ですが、以前の調査事例から6世紀代のものと考えられます。（大野）

【写真：埴輪出土状況】



【埋蔵コラム 熊谷空襲の痕跡—市内工事立合調査の一コマから—】

市内遺跡隣接地での工事立合調査に際し、新築建物の基礎の入る根切溝から火災痕跡を残す瓦・陶器などの混在する灰燼層（かいじんそう）が現れました。この地には戦後すぐに建てられた家屋があったこと、また当時の被災地図の範囲内に入っていることから、瓦礫は第二次世界大戦時の熊谷空襲による被災遺物層である可能性が高いと考えられます。現地表から約15cm下位に深さ30～50cm程の大きな穴を所々に掘り、瓦礫を埋め片付けたと想定されます。木炭片や焦土も多量に含まれ、瓦礫層の厚さは最大で50cmもありました。瓦礫に含まれる瓦は当時の住宅によく使われた棧瓦で、対角に組み合わせの切り欠きを持つものです。陶器には瀬戸焼の皿や甕の破片、溶け歪んだガラス（写真）などもありました。（新井）



連載 くまがやの古墳群

⑪ 上江袋古墳群 —以前から埴輪の出土が知られていた古墳群—

上江袋古墳群は、妻沼地域上江袋・西野地区の福川右岸、妻沼低地の東西に長い自然堤防上に所在する古墳時代後期に造られた古墳群です。妻沼西南地区土地改良事業（ほ場整備事業）に伴う発掘調査により、4基の古墳の存在が確認されています。墳形は全て円墳で、規模は径18m～23mです。古墳は、1基の古墳を除いて埴輪が出土しており、およそ6世紀に形成された古墳群と考えられます。

主体部（遺体を安置した埋葬施設）が確認された古墳はわずかに1基で、奥壁と棺床面に緑泥石片岩の板石、側壁に河原石を小口積みにした竪穴系の横穴式石室です。その規模は、長さ約2.2m、幅約0.7mで、既に盗掘にあっていたようで、出土遺物はない状況でした。なお、本古墳群の周辺は、開墾などにより埴輪の出土が知られており、東側で出土した馬形埴輪は全体像が分かるもので、江南文化財センターで展示中です。（吉野）



第1号墳全景（中央に石室が見える）

文化財センター通信

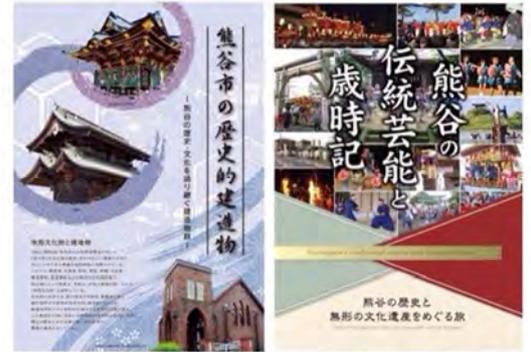
◇文化財センター夏休み企画「あなたも古代人」

今年も夏休み企画として、主に小学生を対象とした古代体験事業を7日間にわたって行いました。体験メニューは、まが玉づくりや埴輪づくりなどです。総勢240名の親子に参加いただきました。本講座では、作品を自由な形状に仕上げることができるのも魅力の一つです。いずれの子供たちも、個性豊かな完成品を手にして嬉しそうでした。(星) 【写真 土鈴づくり体験の様子】



◇熊谷の建造物・伝統芸能リーフレットの刊行

市内に所在する国宝・国重要文化財・国登録有形文化財・県指定文化財建造物・市指定文化財建造物・その他の歴史的建造物について解説したリーフレット「熊谷市の歴史的建造物一熊谷の歴史・文化を語り継ぐ建造物群一」と、市内の無形民俗文化財・無形文化財、熊谷の年中行事などの歳時記について解説したリーフレット「熊谷の伝統芸能と歳時記一熊谷の歴史と無形の文化遺産をめぐる旅一」を作成し、5月から市内各所の施設等で無料配布を始めました。(山下)



◇金子兜太氏を偲ぶ研究会

7月15日、2月に98歳で亡くなった俳人・金子兜太さんを偲ぶ研究会「熊谷の俳諧と金子兜太文学」を市内鎌倉町の名勝「星溪園」で開催しました。研究会では金子さんの俳句や足跡を紹介する講演とともに、俳人で熊谷市俳句連盟名誉会長の天貝弘人さんとのトークセッションが行われました。会場には金子さんが揮毫した「利根川と荒川の間雷遊ぶ」の色紙や著作が展示されたほか、献茶会が開かれました。研究会には金子さんが主宰を務めた俳誌「海程」の同人や、俳句愛好者など県内外から約30名が参加し、戦後俳壇をけん引した金子さんの俳句に思いを馳せました。(山下)



◇奥原晴湖書画研究会

4月21日、市内上之にある龍淵寺本堂において奥原晴湖一門書画研究会が開催されました。龍淵寺近くの旧上川上村に画室を有し晩年の画業に励んだ奥原晴湖とその一門の回顧する行事として、絵画を個人に募り、当日限りの一般公開・展覧会及び講演会「奥原晴湖の生涯と芸術一晴湖芸術の変遷と「南画」の影響関係をめぐって一」を開催しました。冒頭の講演会では本堂に入り切れない程の約150名の聴講者が集まり、一日を通しての展覧会への来場者は約300名を数える盛況となりました。(山下)



【文化財探訪 三ヶ尻・田中神社】

押切橋の北に見える小さな社叢、そこが田中神社です。田中神社は、平安時代(延長五年:927年)の『延喜式』神名帳に「武蔵国幡羅郡田中神社」と記された式内社です。『新編武蔵国風土記稿』には、「水田の中間にあるをもて田中天神といへり」との記述があり、稲作の神様を祀った神社と考えられています。現在は小さな社が建っていますが、江戸時代に当地を訪れた渡辺崋山の実地調査報告書『訪風録』には、「古代八大社ナルヨシ」と記されており、江戸時代以前は大きな社で参道も長かったことが窺えます。

境内には「要石(かなめいし)」(下写真)と呼ばれる石が埋められています。これは地震を封じるための石と伝えられています。これまで当地域で大きな地震がなかったのは、この石が守ってくれているのかもしれませんが。(松田)



文化財コラム 空から見た遺跡 No. 3

—三ヶ尻地内の遺跡—上越新幹線工事の発掘調査—

市域を東西に走るまっすぐな新幹線路は空からもはっきり見えます。この上越新幹線建設工事に先立ち、昭和54年から55年にかけて三ヶ尻地区では遺跡の発掘調査が行われました。観音山の北側に所在する三ヶ尻(林)遺跡と三ヶ尻古墳群で、航空写真では路線延長に沿った細長い発掘区とその遺構を覆うブルーシートがみえ、付近には残された古墳も確認できます。ここからは縄文時代の住居跡 11 軒と古墳 9 基が発見されました。縄文時代前期のムラの跡は市域では数少ない発見でした。また、三ヶ尻古墳群の「やねや塚(三ヶ尻林4号墳)」は保存状態が良好で、石室から水晶玉などの装飾品や鉄製武器など豊富な遺物が発見されました。特に銀象嵌(ぎんぞうがん)に装飾された鉄刀は「頭椎大刀(かぶつちのたち)」に復元される優れた工芸品です。



発掘調査により遺跡は記録保存され、新幹線の走る高架に替わっています。現地には新幹線の高架橋柱がそそり立ち、失われた遺跡のモニュメントの様にも見えます。

遺跡の発掘が記録されている航空写真は他にも千代遺跡群や北島遺跡などあります。紹介した航空写真は国土地理院ホームページで公開されているものです。定期的に撮影された航空写真は国土の歴史書に例えられるでしょうか。故郷の変貌を鳥のように空から見たときの驚きや新たな発見をきっと得られると思います。(新井)

(航空写真のデータ 出典：国土地理院 C-KT-80-3 1980年10月15日撮影)

【マニアックな文化財メモ】「旧代村屋台の100年ぶりの復元」

市内代地区(旧代村)には江戸時代中期より行われている八坂祭礼があり、現在では神輿渡御を中心とした夏祭礼が開催されています。かつては屋台を巡行させ、熊谷八坂祭礼(熊谷うちわ祭)に囃子・演芸の屋台として参加したとの伝承も残っています。平成30年7月15日、祭礼に合わせて、同地区の屋台が約100年ぶりに組立復元され、一般公開されました。公開に際して解説会を開催し、四輪の形態や前面上部の秀逸な彫刻などの特色について説明しました。本市では指定文化財ではない地域の文化財や文化遺産の調査も随時進めています。(山下)



編集後記

7月、BSフジ「アートな夜!」で熊谷出身の画家・森田恒友(1881-1933)が描いた絵画『晩春風景』が紹介されました。大正6年頃(1917)に制作された紙本墨色の絵画で、白と黒の色彩で晩春の山里風景が描かれています。森田恒友は旧玉井村で生まれ、東京美術学校(現・東京藝術大学)で洋画を学んだ後、渡欧しフランスなどで多くの油彩画を描いています。帰国後、日本画へと転向し新たな絵画世界を表現していくこととなります。『晩春風景』はこうした今後の手法について様々な模索と創作を続けていた時期に描かれた作品です。絵画には描いた画家の人生が表現されている。そう考えると、多くの画家が残した数多くの作品と向き合い、その価値を次世代に引き継ぐ意義を改めて感じています。(山下)



発行：平成30年9月1日(2018/09/01)

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係)

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話：048-536-5062 FAX：048-536-4575 メール：c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

HP：「熊谷デジタルミュージアム」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

ブログ「熊谷市文化財日記」、熊谷観光・文化財ナビゲーションアプリ「くまここ」更新中